

「共同研究事業」成果報告書

子どもの主体性を尊重する学級づくり・学級経営の実践

研究代表者 船越 勝（和歌山大学教育学部）
共同研究者 山根木瑛亮（和歌山市立浜宮小学校）
中川 拓大（貝塚市立中央小学校）
江頭尚寛（和歌山市立八幡台小学校）

1. 研究の目的とプロジェクトの活動

子どもの主体性を尊重する学級づくりと学級経営をテーマにして、毎回報告者を決めて、各クラスの実践を持ち寄り、どのようにこうした自主的・自治的な学級像に近づけていくことができるか、実践交流を進めながら、共同研究を進めていった。また、若手の教師の実践の悩みの相談も対応した。その結果、若手教師やゼミ生などの学生の参加も含めて、毎回10名前後で活動を行うことができた。こうした研究の目的と課題に応えるために、共同研究者の代表である船越とゼミ生が報告者の教室を訪問し、その学級づくりの実践をアクションリサーチの視点から支援していった。（なお、江頭実践は2月に発表予定。）

2. 子ども主体の学級づくり

（1）児童の実態

3年2組の子どもたちは、男子12人女子18人の30人学級である。明るく穏やかで、どんなことにも楽しみながら取り組むことができる。お互いのことをよく知り、助け合い、ときにはぶつかり合いながら、前に進んでいこうとする意欲が感じられる子どもたちである。その反面、愛着形成が未完成な児童も多く、3年生という年齢故の幼さもあるだろうが、持ち物や宿題、提出物が揃わないといった生活面の課題を抱えており、その課題からくる学習の定着度合いの差なども顕著に見られる。またADHD傾向の児童や、年齢にそぐわないような大人びた様子の女子児童も複数おり、個別の支援が必要になる場合が多い。だからこそ、一人一人の多様性を認め、誰もが活躍できるようなクラスにしていきたいと思ひ、様々な課題を少しずつ改善しながら、取組を進めている。

（2）クラスが目指すもの

3年生が始まったときに、子どもたちに必要だと感じたのは、「仲間意識」「他者尊重の精神」「自発・自主の力」の3点であった。男女の差や、友達の好き嫌いなどをこえた、誰もが認め合い、助け合うことができるような集団になってほしいと考えた。そのためにまず、「仲間」を大切にするような子どもを育てていこうと決めた。また、自分の考えと違う人がいることは当然であり、その考えや行動を非難するのではなく、受け入れる心の豊かさを育てていきたいとも思っている。互いに認め合い、高め合う経験を通して子どもたちがより一層成長し、『低学年リーダー』として下の学年のことを考え行動できるような集団にしていきたい。そのためにも、仲間意識を育て、まず教室が自分たちの安心でき

る居場所となるようにしていきたいと願い、実践を進めてきた。

担任の願いを受け、学級会で話し合っただどもたちが決めた学級目標は、「下の学年にも自分たちにも優しくする低学年リーダー！」と「先生がいないときでもルールを守ってやるときはやる3年生！」の2つである。子どもたちは日々目標達成に向けて努力している。

（3）学びの基本『班活動』・社会体験『会社活動』

本学級では、学校生活を送るにあたり、基本の集団となる班による活動を大切にしている。立候補で班長を選出し、班長が決まってから班員や座席の位置を決める。毎週班の目標を立て、週末には班会議の時間にふりかえりを行う。そこで出てきた課題をもとに、新たな班目標を立て、目標達成に向けて活動を行う。子どもたちは、小集団を良くしていくために日々意識して行動しているようである。学習の時間においても、班での学び合いを基本とし、困ったときには声を上げられるようにしている。

また、自分たちで立ち上げ活動する係活動にも力を入れて取り組んでいる。係活動とは、自分たちの学級生活をより良くするために、創意工夫しながら自主的・実践的に取り組む活動のことである。本学級では、係活動を『会社活動』として取組を進めている。「クラスに必要である」「あるともっとクラスが良くなる」と思う会社を自分たちで設立し、運営を進めていく。活動には全て意義があり、必ず活動と報告、また給料と称した評価活動を行っている。これらの一連の取組を通して、自分たちで相談しながら仕事を進めることの難しさや大変さを感じるとともに、周りに認めてもらう経験につながればと思っている。

（4）特別活動の取組

本校が研究に力を入れている特別活動を通して、自分たちでつくりあげる経験を多く積むことができるような実践を行ってきた。これまでの取組としては、保護者参加型の校区探検や盲学校児童との居住地交流、下の学年の児童との縦割りによる交流などを行った。校区探検では、協力してくれた保護者との関わりから、自分たちのことを見守り支えてくれる人の存在について改めて知ることができた。居住地交流では、相手のことを考えることの大切さを学び、担任としても普段見せない子どもたちの姿を発見することができた。下の学年との縦割りによる交流においては、下の学年を意識することによって自分たちの行動をふりかえる機会になったとともに、誰もがリーダーとして前に立つ経験をする貴重な機会となった。どの活動も、学級会の時間に自分たちで話し合いを進め、合意形成をはかりながら全員で決定してきた。合意形成をはかるためには、相手の意見をまず聞くこと、そしてその意見を認めながら自分の意見を出していくことが重要になる。全員の意見をすり合わせ、クラスの意見として決定していく。決定したことは必ず全員で実行し、振り返りを行う。そこで出された課題をもとに、次の活動につなげていく。この往還的な取組を重ねることで、自治について学び、力を付けていくと考えている。自分とは異なる考えをもつ子がいることに気付いたり、活動の中で友達の意外な一面を知ったりする機会がある

など、特別活動のもつ力は大きい。来年いよいよ高学年の仲間入りをするというこの1年のゴールイメージに置き、これからも特別活動をベースにした学習を行なっていく。

(5) おわりに

クラスが子どもたちの安心できる居場所となり、お互いに認め合いながら過ごしていくことを願い取組を進めてきた。友達や小集団だけでなく、クラス全体の中に仲間意識が広がりつつあることを嬉しく思っている。教師としてできることは、子どもたちの素敵な姿に出会わせてあげる場を設定することではないかと考えている。表面的に友達のことを知るだけでなく、大切なのは互いの考えや思い、そして違いを深く知り、認め合うこと。認められることが力になり、お互いに高め合っていく、この1年でそんな集団になってほしいと思う。今でもきつい言葉や、相手のことを受け入れられないことからくるトラブルが起こっていることは事実である。そんなときこそ、一人一人考えが違うことを再確認し、どのような違いがあるかを知る場面にしていきたい。自分を認めてもらい、友達を認めていくという経験を、これからも積ませていきたいと思う。仲間との出会い直しをしながら、友達や他の学年、先生などたくさんの人に認められることを通して、より一層大きく成長してほしいと願っている。(山根木)

3. 教師との対話からつながる

～個から集団へ 幼児期をコロナ禍で過ごした子どもたちのために学年で大切にしたこと～

(1) はじめに

私の勤務する学校は、大阪府の南部、泉州地域にある。地域では昔から、だんじり祭りや、太鼓台祭りがあり、祭り文化が根づくつながりをとても大切にしている地域である。本校は市内の中心に位置し、全校児童数が650人ほどの、市内では大規模校にあたる。また、学校の特色としては、3年前に小学校施設内に幼稚園が併設され、幼小施設一体型小学校となった。今年度は、幼稚園と小学校の9年を一括りにした教育を目指して、取り組みを進めており、幼稚園の年長児から、小学校一年生に進級するときの校種間ギャップを少しでも解消できるように、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを幼稚園の職員と一緒に作成し、次年度入学の児童を見守っていく体制を作っている。

(2) 対話で大切にしていること

教師として、この10年ほど子どもとの対話を大切に学級経営をおこなってきた。教師との対話で必要なものは、安心感と誰にでも同様に接することだと考えている。その中で毎年大切にしている3つのことがある。

①理由の説明

子どもたちとの対話を大切にするとき、特に大切にしているものである。先生が叱る場面で叱った際、他の子どもたちが聞いていたり、クラスの授業時間が少し減ったりする場面は少なくない。そんなときに、なぜ先生は叱ったのか、なぜ今授業時間を止めてまでも話をしないといけないのかということを簡潔に説明する。理由を伝えることで叱られた

理由、先生が大切にしていることがクラスで共有できる。これは安心感への近道だと考えている。

②叱った時は、その倍良いところを褒める

叱られると子どもはその後、後ろ向きな気持ちを抱えて授業に臨むことになる。その気持ちをクラス全体で知らないうちに盛り上げられるように、叱った児童はもちろん、クラス全体も褒めることを大事にしている。そうすることで授業への切り替えが速くなったり、すぐに次の休憩時間には遊びに出たりとクラスの雰囲気が良いまま一日を終えられることが多い。

③引きずらない

教師も1人の人間であり、子どもたちを叱るときには苛立ちや、悲しい気持ちを抱えていることが多い。しかし、教師がいつまでも引きずっていると子どもたちには悪影響しかなく、対話しづらい状況が生まれてしまう。そんな時に切り替えられる術を持つことも対話で学級づくりを進めていくためには必要だと考えている。

(3) 学年で動く ～学年で大切にしたこと～

今年度は、一年生の担任を務めており、3クラス104名でスタートを切った。学年集団の構成は、6年目、2年目の先生方と、学年付きの支援学級の先生の計4名の学年集団で、比較的若い学年集団構成となっている。特に二年目の教員は、初めての学級担任であり、さまざまな状況でのフォローアップが必要であった。

まず、最初の学年会の時に、学年として大切にしたいことを3点共有することにした。

①担任1人でクラスを見るのではなく、4人で104人の担任として考えていくこと。

これは、自分のクラスだけを見ていくのではなく、他のクラスの児童にも気を配れるようになってほしいとの願いと、何かトラブルがあっても、お互いのクラスを知っていれば、誰でも指導や、適切なアドバイスができることを狙って共有した。具体的には、毎日少しの学年会で子どもたちの様子の共有をし、週に1時間教科間での交換授業（今年度は、国語、音楽、体育で交換）を実施してきた。

②先生もチャレンジをすること

子どもたちと出会い、成長していく中で必要と感じたことには、積極的に取り組んでほしい、先生も常にアップデートをしてほしいという願いで伝えた。その中で、「学年として動く」を大切にしていくために、チャレンジすることは、必ず学年にも伝えるようお願いした。そうすることで、「あのクラスだけ」というマイナスイメージから先生方を守ることも同時に考え、スタートしていった。

③2年生への着地（どのような子どもたちに育てたいか）をイメージすること。

4月当初まだ子どもたちと出会ってないまま決めていくのは難しいので、これは1学期を日かけて考えていくことにしたいと伝えた。後の章でも出てくるが、子どもたちの実態より、今年度は5月終わりに、「ワンチーム」と学年目標を設定し、2年生までに他の園から来た友だちを増やすことを目標にした。

これら3つを大切に、今年度をスタートすることにした。

(4) 子どもたちを適切に見とる（コロナ禍を踏まえて）

子どもたちが入学して一つの不思議なことが教室で起きていた。これまで担任してきた一年生は、入学早々新しい友達を作ろうと積極的に声をかけたり、うまく表現できずに手が出てトラブルになったりしていたが、それらの行動がほとんど見られなかった。1ヶ月が過ぎようとしても、自分たちから関係を広げていくことが見られる児童が少なく、他人への興味の低さや、何かをやり遂げようとする根気強さが弱いように感じるが多々あった。これから学年としてどのような手立てを打っていくかを試行錯誤していた。

そんなときに、併設している幼稚園の園長と話す機会があり、コロナ禍が影響し、集団生活を一番経験しないといけない時期に制限がかかっていたことを知った。コロナ禍の子どもたちにとって、集団で遊んだり、勉強することが当たり前でないことに気づき、他人に対しての興味の薄さや、根気強さがいないことなどの理由の一つとなっていることに結びついた。そして、もう一度幼稚園や保育園の発達から考え直す必要があると感じた。

そこで学年会で3つのことに徐々に取り組んでいった。

①教師と子どもたちとの関係の再構築

これは、幼児期の発達において大切な対大人との関係がないと場に安心が持てないということから、多くの児童がまだまだ大人への親密な関係を求めていると仮説を立て、様々なトラブルや、お試し行動を、より親身になって聴く姿勢をとった。

②達成感を味わう

本校では、運動会が6月にあり、この大きな行事を学年で成長していく大きなステップにしようと考えた。そこで、子どもたちの前述の課題より他人に興味を持ち、一緒にやり遂げることを目標に「ワンチーム」という学年目標を立て取り組んだ。最初は他人に興味のなかった子どもも、練習が進むにつれ、互いに声をかけたり、一緒に練習したりするようになっていった。この頃から少しずつ子どもたちの交友関係も広がっていった。

③保護者とつなぐ

子どもたちの中には、幼稚園や、保育園の送迎は、コロナ禍の影響で、門での受け渡しで終わっていたところもあると聞き、子どもたち一人ひとりのことを発信していく必要も感じた。そこで、日直システムを導入し、担当した子どもに一言メッセージを書いて、連絡帳へ貼っていった。そうすることで、保護者にも安心感を持ってもらおうと工夫した。

これら課題を明確にし、手立てを共有し、取り組むことで、学年として、どのように2年生に向けて着地させていきたいかのビジョンを具体的に持つことができるようになった。これこそが子どもの成長にとって大切な「見とり」であり、子どもたちと一緒に私たち教員も足並みを揃え取り組むことの大切さを改めて感じた。

(5) 最後に

まだまだ、書ききれないほどたくさんのトライアンドエラーを繰り返し、子どもたちは、

ようやく落ち着きを見せ始めた。若い二年目の教員も、子どもを適切に「見とる」ことや、学年全体で一緒のことに取り組むことの意味や、意義を感じることができてきているのではないかと最近思う。

教員がよい関係性を築けると、子どもたちにもとても良い影響を与えると感じる。決してなあなあの関係ではなく、一つのゴールに向かって歩いていける学年集団に日々感謝し、2年生へと送り出せるよう最後の1日まで取り組み続けたいと思う。（中川拓大）

4. 今年度の成果と課題

(1) 学級に組織を立ち上げ、自治の世界を創る

今年度のプロジェクトで報告を受けた山根木実践は、まず第一に、一人ひとりの子ども理解と発達課題をていねいに分析して、それに応じた指導や支援を行っており、そうした子どものみとりと関係づくりの丁寧さが、新学期から子どもたちとの信頼関係を急速に作り上げることにつながっている。第二に、班活動や会社活動（山根木学級では係活動のことをより自分たちがやりたい活動や組織を立ち上げることを子どもたちに意識化してもらいたいという趣旨から、「会社活動」と呼んでいる）などの学級内の多様な小集団をつくり、いわば組織の力に着目して、実践を進めていることである。第三に、自治的な学級づくりを進めるために、議長や書記もすべて子どもが行う子ども主体の学級会の運営が追求されていることである。

(2) 対話型の実践と学年集団づくりをめぐる

それに対して、中川実践は、第一に、多様な活動が取り組まれているところは山根木実践と共通しているが、そのプロセスが教師と子どもの対話として進められていることである。山根木実践は子どもと基本は距離を取り、子どもの組織が中心になって運営していく、いわば、アウトボクシングをスタイルにしているのに対して、中川実践は子どもとの距離が近く、対話で深く切り込んでいくインファイトのスタイルになっている。中川実践の場合、1年生という発達段階や幼小連携を追求しているということが、こうした対話型という実践のスタイルを選ばせているということも言えるかもしれない。また、こうしたスタイルのどちらが正しいスタイルかということではなく、それぞれの教師・人間としての性格が出ている側面もあるし、また、たとえば、山根木実践でも、学級で参観していると、基本は子どもたちの小集団中心とはいえ、場面によっては、子どもとの近い距離で対話のアプローチをとることもあるので、TPOに応じて選択されているともいえるだろう。

中川実践は、第二に、3学級の担任と密接に連携を志向した学年集団づくりを同時に施行しているところが大きな特徴になっている。それは、学級づくりだけでなく、算数などの基本的な教科は、全学年・全単元に渡って、主要発問なども含めた学習指導案も学校で共有されているということも関わっている。これは、GIGA スクールを志向し、全担任がタブレットを使いこなすスキルを持っているからこそ可能になっているともいえる。しかし、注目すべきは、授業も含めて、学年で揃えて学級づくりの実践を行うのは、新採など若手教師も含めて、辞める教師を出さないためだという説明はプロジェクトのなかでも大きな問題提起になった。実際私が参観に行ったときでも、中川教諭は隣の若手教師の学級の子どもの指導を一緒にしていたし、困難な保護者対応はむしろ率先して行っていた。こうした同僚の支えのなかで、若手教師は学級づくりや保護者対応を身に付けていくのだし、職場の支え合い、励まし合う同僚性が構築されていくのだと考えているので学ぶことは多

った。同時に、授業の内容まで一体化していくのか、もう少し緩やかにやれないのかなどの議論も出されて、今後の重要な検討課題となった。（船越）